



羅針盤

塩原 哲夫

Tetsuo Shiohara

杏林大学医学部皮膚科教授
Visual Dermatology 編集委員



ステロイド内服の甘い罠に嵌る時

ある地方都市に、名医と評判の医師がいた。そこへ行くと、どんな病気でもよくなり、治せない病気などないのではないかというのが、もっばらの評判だった。そのうちに、その人は専門の皮膚科医ではなく、東京のさる大学病院の有名医師がパート医としてその病院に来ていたことが判明した。不思議に思って調べるうち、その医師の処方する内服薬にはステロイドが混ざってあるらしいこともわかってきた。その医師は学会での発表から想像する限り、論理的で患者思いの方だと印象が強かっただけに、筆者は俄に信じられない思いであった。

しかし、彼の置かれた状況を考えると、そのような危険な罠に嵌った理由もわからないわけではないと思うようになった。おそらく、その病院では有名な先生に来ていただくのだから、それなりの待遇はしたであろう。患者側も、名医なのだからこれまで治らなかった病気も、きっとたちどころに治してくれるに違いない、という過大な期待をもって迎えたはずである。しかし、難治のアトピー性皮膚炎など、どんな医師が診ても、たちどころに治せるはずもない。唯一、たちどころに治せる治療として、彼が内服ステロイドを選択したのも理解できないわけではない。

しかし、である。始めたステロイドは、いつか止めねばならない。止め方を考えずに、生命予後のよいアトピー性皮膚炎に内服ステロイドを処方することは禁じ手である。この治療を受けた患者は、さすが名医だから今まで

診ていたヘッポコ医者と違い、たちどころに治ったと思いい込んでしまうのである。きっと彼のなかでは、自分の行っている医療行為が学問的、道徳的にみたら正しくないとわかってはいたに違いない。しかし、評価が高くなるほどに、彼のなかで自分のしてきた行為を正当化していったであろう。これだけ多くの患者さんが一時的にせよよくなり、感謝しているのだから、と。

こうやって人は甘い罠に嵌っていく。内服ステロイドの罪は、罠に嵌った本人がツケを払うのならまだしも、しばしばそれを後から診た医師が払わされるということころにある。

筆者にとって、今も耳の底に残る言葉がある。それは今から30年以上前のできごとである。その患者は近医で多量の内服ステロイドを不定期に投与され、当初は軽快が得られていたが、そのうち奏効しなくなったあげく、当科に紹介されてきた。それはリンパ腫だった。しかし、それを患者に伝えるには遅すぎた。もう手の施しようもなくなった患者に、打つ手は限られていた。その最期が近づいた患者の病室を出ようとした筆者の背中に、彼女は当時の筆者にとってあまりに酷な言葉を浴びせた。“こんな病気も治せないなんて！ 治せないのなら、初めからそう言ってくれれば、先生なんかについて来なかったのに！”それに何の反論もできない筆者は、悄然とその病室を立ち去った。甘い罠を呪いたくなるのは、まさにこの瞬間なのである。